



Title	第一次大戦前の自由党と労働党 : イングランド一人区、1900年～1910年12月
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 169-185
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99175
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第一次大戦前の自由党と労働党

ー イングランドー人区、1900年～1910年12月ー

岡 田 新

1. 自由党の再生と労働党

イギリスの自由党は、20世紀初頭に、19世紀末に陥った深刻な危機と低迷の淵から、劇的な再生を遂げた。キャンベル・バナマン（Campbell-Bannerman）とアスキス（Asquith）を首班にいただいた自由党政権は、老齢年金や国民保険制度などの積極的な社会改革を推進し、土地貴族の牙城である貴族院の拒否権を葬り去って、イギリスの憲政史に新しい段階を切り開いた。この自由党の目覚ましい再生の基盤は果たしてどこにあったか。この点をめぐってイギリスの歴史家は、華やかな論争を繰り広げている。^①

この論争は多彩な論点を含んでいる。しかしその中でも、自由党と労働党の支持層の関係は、クルーシャルな意義をもつ論点の一つであろう。というのも、両党の選挙基盤がいかなる関係にあったかは、自由党と労働者階級の「革新ブロック」（ピーター・クラーク、Peter Clarke）の存在を検証する上で、決定的な重要性をもつからである。^②

労働党の議席は、1900年から1910年12月の4つの総選挙の間に、2議席から42議席に増大した。しかし実際には、当時の労働党の政策には、自由党と大きな隔たりはなかった。また労働党の議席のうち15議席は、炭鉱労組の労働党への加盟によって自由党から移籍したものであった。しかもこの時期自由党と労働党は、秘密裡のうちに選挙協定を結んで、少なからぬ選挙区で立候補者を調整していたのである。

両党の間に選挙協定が結ばれていた以上、獲得議席の分布から単純に自由党と労働党の支持層の違いやその関係を判断することはできない。実際、労

働党が獲得した議席を、自由党の立候補者の有無との関係で分類してみると、自由党が労働党と対抗した場合には、労働党はほとんど議席を得ることができなかったことが分かる。労働党には、自由党と対抗して議席を得る力はまだ育っていなかったのである。^③

更に二人区の労働党の当選議席の得票を分析してみると、統一党の票のほとんどが単独票（Plumpers）であったのに対し、労働党と自由党の場合は、圧倒的多数が労働党と自由党の組み票（Splits）で投票されていた。ここから見る限り、少なくともこうした二人区では、自由党と労働党の選挙基盤は、極めて深く重なっていたと考えられる。こうした選挙区では、20世紀初頭の自由党と労働党は、いわば共生とも呼び得るような関係にあったのである。^④

では当時大多数を占めていた一人区では、自由党と労働党の選挙基盤はどれほど重なっていたのであろうか。二人区では、有権者は二票を持ち、単独票として自由党だけに投票したり、組み票として自由党と労働党に票を分けることが許され、その記録が残っている。^⑤ しかし一人区については、自由党と労働党への投票行動の重なりを直接に観察できる資料は存在しない。けれども、一人区についても、連続した選挙結果を観察して、政党の立候補者の組み合わせの変化が、選挙結果にどのような影響を及ぼしたかを分析することができれば、自由党支持者がどの程度、労働党候補に流れる傾向があったかを推論することができるであろう。

本稿は、こうした観点から、各々19世紀の末以来の自由党の停滞、20世紀初頭の自由党の躍進、そして自由党の復興の定着を示す1900年、1906年、1910年1月と12月総選挙の一人区の選挙結果について、候補者の組み合わせの変化が、選挙結果にどのように影響したかを分析する試みである。ただし、ここでの分析の対象は、イングランドの一人区に限定したい。スコットランドとウェールズの自由党は、各々の民族的なナショナリズムを担う党でもあり、別個の分析を必要とすると思われるからである。^⑥

第一次大戦前の自由党と労働党

表1 イングランドの労働党獲得議席

年次	一人区A	一人区B	二人区	計
1900	0 (4)	0 (3)	1 (6)	1 (13)
1906	15 (20)	2 (12)	9 (11)	26 (43)
1910. 1	25 (33)	0 (18)	8 (11)	33 (62)
1910. 12	25 (29)	0 (5)	9 (10)	34 (44)

(出典) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, 2 nd eds., (1989) より算出。一人区Aは、自由党候補のいない選挙区、一人区Bは、自由党候補のいた選挙区。括弧内は労働党の立候補者の数。

2. 政党の対決パターンと選挙結果

既に述べたように、この時期、労働党は自由党と対抗して議席を獲得することはほとんどできなかった。念のため、改めてイングランドにおける労働党の獲得議席を自由党の立候補者の有無との関係で分類すると、表1のような結果となる。

この表を一瞥するだけで明らかなように、イングランドの労働党の議席は、1900年選挙のわずか2議席を例外として、すべて自由党候補のいない一人区か、自由党候補と共存できる二人区で獲得されたものであった。事実労働党は、二人区では常に候補者を一人だけたて、意識的に自由党との組み票を獲得していた。これは、自由党との候補者調整がなければ、労働党が議席を獲得することは、困難であったことを示唆している。

だが、これは労働党がたまたま当選した議席の数を自由党候補の有無で概括的に分類した結果に過ぎない。精密に状況を把握するためには、すべての選挙区を対象として、自由党、労働党、統一党、その他の立候補者の組み合わせと、選挙の結果、とりわけ得票率の変動との関係を分析する必要がある。

第三次選挙法改正後の選挙制度の下では、イングランドの435選挙区のうち、一人区は414を数えた。この414の一人区における、1900年から1910年12月までの4つの選挙の当選者を、政党の立候補者の組み合わせ別に分類すると、表2から表5のような結果となる。また各党から立候補した候補者が獲得した得票率を、立候補者の組み合わせ別に分類すると、表6、表7に掲出する結

果となる。

表 2 立候補者の組み合わせ別の党派別議席数
1900年総選挙・イングランド一人区

	自由対統一	労働対統一	三つ巴	その他	無投票	計
統一党	160(258)	4 (4)	3 (3)	4 (6)	131(131)	302(402)
自由党	98(258)	—	0 (3)	1 (4)	11 (11)	110(276)
労働党	—	0 (4)	0 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (7)
その他	—	—	—	2 (7)	0 (0)	2 (7)
計	258(516)	4 (8)	3 (9)	7 (17)	142 (142)	414 (692)

出典： F.W.S.Craighed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit., (1989) より算出。

注記 1) 分類は、上記のクレイグに従うが、統一党は保守と自由統一党を含み、自由党は、Lib-Lab の候補を含む。Independent は、保守系の場合も自由党系の場合も「その他」に分類する。

2) 括弧の中は立候補者の数を示す。

3) 「その他」の立候補の組み合わせは、「統一・自由・その他」が 3 (当選者統一 2、自由 1)、「統一・その他」が 3 (当選者統一 2、アイリッシュ・ナショナリスト 1)、「自由・その他」が 1 (当選者、独立候補 1) である。

表 3 立候補者の組み合わせ別の党派別議席数
1906年総選挙・イングランド一人区

	自由対統一	労働対統一	三つ巴	その他	無投票	計
統一党	99(342)	5 (19)	5 (11)	5 (21)	4 (4)	118(397)
自由党	243(342)	—	4 (11)	16 (21)	14 (14)	277(388)
労働党	—	14 (19)	2 (11)	1 (2)	0 (0)	17 (32)
その他	—	—	—	2 (25)	0 (0)	2 (25)
計	342(684)	19 (38)	11 (33)	24 (69)	18 (18)	414(842)

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op.cit. より算出。

注記 1) 分類は、表 2 と同じ。

2) 括弧の中は立候補者の数を示す。

3) 「その他」の立候補の組み合わせは、「統一・自由・その他」が 19(当選者は自由 14、統一 4、独立 1)「統一・その他」が 2 (当選者統一 1、アイリッシュ・ナショナリスト 1)、「自由・労働」 1 (当選者自由 1)、「自由・その他」 1 (当選者自由 1)、「労働・その他」 1 (当選者労働 1) である。

第一次大戦前の自由党と労働党

表 4 立候補者の組み合わせ別の党派別議席数
1910年1月総選挙・イングランド一入区

	自由対統一	労働対統一	三つ巴	その他	無投票	計
統一党	196 (341)	8 (33)	5 (18)	5 (16)	5 (5)	219 (413)
自由党	145 (341)	—	13 (18)	10 (14)	1 (1)	169 (374)
労働党	—	25 (33)	0 (18)	0 (0)	0 (0)	25 (51)
その他	—	—	—	1 (16)	0 (0)	1 (16)
計	341 (682)	33 (66)	18 (54)	16 (46)	6 (6)	414 (854)

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit., より算出。

注記 1) 分類は、表 2 と同じ。

2) 括弧の中は立候補者の数を示す。

3) 「その他」の立候補の組み合わせは、「統一・自由・その他」14 (当選者統一 4、自由 1)「統一・その他」2 (当選者統一 1、アイリッシュ・ナショナリスト 1)。

表 5 立候補者の組み合わせ別の党派別議席数
1910年12月総選挙・イングランド一入区

	自由対統一	労働対統一	三つ巴	その他	無投票	計
統一党	166 (311)	4 (27)	1 (5)	1 (9)	48 (48)	220 (400)
自由党	145 (311)	—	4 (5)	7 (8)	12 (12)	168 (336)
労働党	—	23 (27)	0 (5)	0 (0)	2 (2)	25 (34)
その他	—	—	—	1 (9)	0 (0)	1 (9)
計	311 (622)	27 (54)	5 (15)	9 (26)	62 (62)	414 (779)

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit., より算出。

注記 1) 分類は、表 2 と同じ。

2) 括弧の中は立候補者の数を示す。

3) 「その他」の立候補の組み合わせは、「統一・自由・その他」8 (当選者統一 8 (当選者統一 1、自由 7)、「統一・その他」1 (当選者アイリッシュ・ナショナリスト 1)。

表6 立候補者の組み合わせ別の統一党の得票率の平均値(%)

イングランド一人区1900-1910、12月

年次	自由対統一	労働対統一	三つ巴
1900	53.2	58.0	51.3
1906	47.0	43.7	37.5
1910.1	52.0	44.9	36.3
1910.12	51.2	44.0	36.5

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit.,
より算出。

表7 立候補者の組み合わせ別の自由党・労働党の得票率の平均値(%)

イングランド一人区1900-1910、12月

年次		自由対統一	労働対統一	三つ巴
1900	自由党	46.8	—	35.7
	労働党	—	(42.1)	(13.0)
1906	自由党	53.0	—	33.3
	労働党	—	(56.3)	(29.2)
1910.1	自由党	48.0	—	42.8
	労働党	—	(55.2)	(20.9)
1910.12	自由党	48.8	—	39.2
	労働党	—	(56.0)	(25.6)

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit.,
より算出。括弧は労働党の得票率。

まづイングランドの一人区の選挙結果全体を眺めると、自由党は、1910年の二度の選挙戦で、1906年の大勝利の水準を維持することはできなかったことが分かる。議席では、1906年で新たに獲得した167議席のうち、1910年1月には100議席近くを落し、結局二度と取り戻すことができなかった。もっとも、自由党の議席は、1900年の選挙の水準までは後退せず、60議席弱は依然自由党に留まった。とはいえ、1910年の2回の選挙では、自由党は統一党に第一党の座を譲り、労働党の議席を加えても、なおイングランドの全議席の半数に及ばなかった。自由党と労働党は、都市部の二人区での当選者と、スコットランド・ウェールズのケルト系周縁地域の議席を加えて初めて保守

勢力を凌ぐことができたのである。⁶⁾

自由党と統一党との一騎討ちの選挙区の得票率を見ても、1910年の2回の選挙では、自由党は1906年選挙の結果から5%も得票率を下げ、1900年の数パーセント上のレベルにまで戻っている。

しかし、イングランドの一人区で実際に選挙が闘われた選挙区のうち、8割から9割の選挙区は、依然として自由党と統一党の間の一騎討ちであった。労働党は、二大政党を打ち負かして議席を奪う力がなかったのはもちろん、まだ、二大政党に伍して候補者をたてて互角に選挙を争う勢力とはなっていないのであった。しかし1906年以降、自由党との候補者調整のおかげで、労働党と統一党の対決パターンは、1900年の4選挙区から、1906年には一挙に19選挙区に、1910年1月には33選挙区、12月には27選挙区に増大している。しかも注目すべきことには、ここでは労働党は、1906年には14議席、1910年1月には25議席、1910年12月は23議席と優れた成績をあげたのである。1906年には、自由党対統一党の選挙区での自由党の得票率の上昇は6%あまりだった。これに対して、労働党と統一党の一騎討ちの選挙区の得票率は14%もの上昇を記録した。更に1910年1月、12月に、自由党対統一党の選挙区では、自由党は各々1906年から5%、4%も得票率を落した。これに対して労働党対統一党の選挙区では労働党は、1.1%、0.3%の低下に留まり、1906年選挙で上昇した高い得票率を維持するのに成功している。

従って労働党は、もちろん自由党、統一党と互角に争う力はなかった。けれども自由党と協力して統一党と一騎討ちが行われた場合には、統一党と自由党との一騎討ちよりも、労働党は更に反保守票を結集することができたのであった。

3. 自由党と労働党の間の票の移動

しかし先のような集計は、あくまでイングランドの選挙戦の平均像を示したものに過ぎない。この集計は、同一の選挙区で、政党の対決パターンや立候補の組み合わせが変わった場合、どのような得票の移動が起ったかを直接に

表すものではない。これを分析するためには、全体を眺めるだけでなく、立候補の組合せが変わった選挙区を拾い出して、対決の組み合わせが変わらなかった選挙区の場合と比較することが必要である。

今仮に、自由党と労働党の選挙基盤が完全に重なっていたと仮定すれば、前回の選挙で自由党に投票していた有権者は、次の選挙で候補者が労働党に変わっても、統一党に支持を変えることなく、ためらわずに労働党に投票するであろう。また労働党の支持者も、労働党が立候補していない場合には、進んで自由党に投票するであろう。しかし両方の党から候補者が立った場合には、票は分裂し、本来双方の党が独自でもつ党勢に即して、票は分かれることになるであろう。

しかし自由党への支持、労働党への支持そのものも、当然全体として、選挙毎に変動する。従って、自由党と統一党の対決から、労働党と統一党の対決へと組み合わせが変わった選挙区を取り上げて、前回の選挙での自由党の得票率と、次の選挙での労働党の得票率とを単純に比べてみても、それは、全体的な変動を組み込んだ結果であり、政党の組み合わせの変化によって生じた影響だけを特定することはできない。だが、もし政党支持の変動が一律におこったと見なすならば、自由党の候補者に代わって労働党候補が立った選挙区と、自由党候補がそのまま引き続いて立候補した選挙区との得票率の変動とを比べることによって、政党の組合せの変化が、得票率の変動に与えた影響を推定する材料を得ることができるであろう。

もし自由党と労働党の支持者が完全に重なっていたならば、自由党候補が引き続いて立候補した選挙区と、労働党候補が自由党候補に変わった選挙区での、自由党と労働党の得票率の変動には、大きな違いが見いだされないはずであろう。

ただし厳密に言えば、この分析手法は、自由党と労働党との選挙基盤の重なり程度は、選挙によって変動しないことを前提としている。もしこの重なり具合が選挙毎に変動しているとすれば、得票率の変動の要因には、もう一つの変数が加えられることになる。しかし自由党と労働党の間には大きな

第一次大戦前の自由党と労働党

表 8 立候補の組み合わせの変化と政党別得票率の平均値 (%)

自由党対統一党の組み合わせからの変化、
イングランド一人区 1900—1910、12月

年次	自由対統一	労働対統一へ	三つ巴へ
1900	L 46.6	L 42.0	L 48.9
1906	L 56.2 (216)	Lab 57.1 (7)	L 35.1 Lab 29.6 (7)
1906	L 52.8	L 58.9	L 60.9
1910. 1	L 47.3 (309)	Lab 58.7 (9)	L 42.1 Lab 20.3 (12)
1910. 1	L 49.0	—	L 67.3
1910. 12	L 48.6 (282)	—	L 48.2 Lab 21.5 (1)

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit., より算出。

注記 1) L は自由党を、Lab は労働党の得票率を示す。括弧の中は、該当する選挙区の数。

2) 「自由対統一」とは、続く二つの選挙が両方とも自由党対統一党の組み合わせで行われた選挙区を指す。「労働対統一へ」とは、自由党対統一党の組み合わせから、労働党対統一党への組み合わせに変わった選挙区を指す。「三つ巴へ」とは、自由党対統一党の組み合わせから自由党、労働党、統一党三者の争いになった選挙区を指す。

3) 破線で区切られた欄の上段は、自由党対統一党の組み合わせで行われた選挙の自由党の得票率を、下段は、次の選挙での各々の組み合わせで行われた得票率を示す。

政策的な対立がなかったという事情から考えれば、自由党と労働党の選挙基盤の重なり具合が、選挙毎に変動していたと想定するのは、あまり現実的な仮定ではないであろう。こうした分析は、自由党と労働党の支持者の相関関係を精密に測定するには十分なものとは言い難い。けれども、こうした分析は、自由党と労働党の選挙基盤がどの程度深く重なっていたかを推測する一定の根拠を与えてくれるであろう。

そこでまず、1900年と1906年、1906年と1910年1月、1910年1月と1910年12月に、立候補者の組み合わせが変わったケースを抽出してみよう。表8は、自由党対統一党の組み合わせで闘われた選挙区の政党の得票率が、次の選挙での対決の組み合わせによってどのように変化したかを示している。表9は、労働

表 9 立候補の組み合わせの変化と政党別得票率の平均値（％）

労働対統一党の組み合わせからの変化
 イングランド一人区 1900－1910、12月

年次	労働対統一	自由対統一へ	三つ巴へ
1900	Lab 40.8	Lab 36.7	Lab 49.8
1906	Lab 63.0 (2)	L 53.6 (1)	L 28.2 Lab 39.1 (1)
1906	Lab 56.7	Lab 48.3	Lab 58.8
1910. 1	Lab 51.2 (17)	L 50.2 (1)	L 41.0 Lab 16.6 (1)
1910. 1	Lab 57.7	Lab 41.9	Lab 45.3
1910. 12	Lab 56.1 (24)	L 42.8 (4)	L 34.7 Lab 8.9 (1)

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit.,
 より算出。

注記 1) L は自由党を、Lab は労働党の得票率を示す。括弧の中は、該当する選挙区の数

- 2) 「労働対統一」とは、続く二つの選挙が両方とも労働党対統一党の組み合わせで行われた選挙区を指す。「自由対統一へ」とは、労働党対統一党の組み合わせから、自由党対統一党への組み合わせに変わった選挙区を指す。「三つ巴へ」とは、労働党対統一党の組み合わせから自由党、労働党、統一党三者の争いに変わった選挙区を指す。
- 3) 破線で区切られた欄の上段は、労働党対統一党の組み合わせで行われた選挙の労働党の得票率を、下段は、次の選挙での各々の組み合わせで行われた得票率を示す。

党対統一党の組み合わせで闘われた選挙区の政党の得票率の変化を示している。更に表10は、自由、労働、統一の三つ巴の選挙区の得票率が次の選挙でどのように変化したかを示している。

まず表 8 から判明することは、1900年－1906年、1906年－1910年 1 月のどちら場合も、自由党対統一党の組み合わせが、労働党対統一党の組み合わせに変わっても、労働党が獲得した得票率は、組み合わせが変わらなかった選挙区での自由党の得票率の変化に比して、低いどころか、むしろ組合せが変わらなかった選挙区を上回っていることである。1906年選挙では組み合わせが同じ選挙区では、自由党得票率は1900年に比べて10％上昇した。これに対して、労働党に変わった選挙区では、得票率の上昇は15％にも達した。また1910年 1

第一次大戦前の自由党と労働党

表10 立候補の組み合わせの変化と政党別得票率の平均値（％）

自由党・統一党・労働党の組み合わせからの変化

イングランド一人区 1900-1910、12月

年次	三つ巴			自由対統一へ			労働対統一へ		
1900	—			L	35.9	Lab 11.0	L	25.2	Lab 20.1
1906	—			L	56.3	(1)	Lab	66.1	(1)
1906	L	38.5	Lab 30.8	L	38.8	Lab 21.9	L	18.9	Lab 42.7
1910. 1	L	40.4	Lab 26.0 (2)	L	54.7	(6)	Lab	54.7	(3)
1910. 1	L	38.6	Lab 31.0	L	44.0	Lab 17.2	L	27.2	Lab 31.2
1910. 12	L	36.4	Lab 31.6 (3)	L	55.1	(11)	Lab	54.7	(2)

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results*, op. cit., より算出。

注記 1) L は自由党を、Lab は労働党の得票率を示す。括弧の中は、該当する選挙区の数。

2) 「三つ巴」とは、続く二つの選挙が両方とも自由党・統一党・労働党の組み合わせで行われた選挙区を指す。「自由対統一へ」とは、「三つ巴」から自由党対統一党の組み合わせに変わった選挙区を、「労働対統一へ」とは、「三つ巴」から労働党対統一党の争いに変わった選挙区を指す。

月選挙では、自由党候補が引き続いて立候補した選挙区の得票率が5%も低下したのに比べて、候補が労働党にかわった選挙区では、前回の自由党の得票率をほぼ完全に守り抜いている。これは少なくとも、こういう選挙区に限って言えば、労働党が、自由党の票を継承し、更に反保守票をかなり積み上げる力をもっていたことを示している。

一方、労働党対統一党の組み合わせから自由対統一党へ変化したケースは数が極めて限られており、1906年、1910年1月については1例ずつしか見あたらない。従って、この結果を一般化することは適当ではない。だがこの例でも、1900年から1906年の得票率の上昇は、労働党候補が引き続いて立候補した選挙区の23%という際だって高い上昇と比べればやゝ低いものの、17%という極めて高い上昇を示している。また1906年から1910年1月には、労働党が引き続いて立候補した選挙区では5%あまり得票率を減らした。これに対して、労働党から自由党へ候補者が変わったところでは、逆に2%も上昇す

る良い成績を残している。そして4例と比較的ケースが多い1910年1月と12月の場合にも、労働党が立候補して組み合わせの変わらない選挙区が1.6%得票率を下けているのに対して、自由党に変わった選挙区では逆に1%ほど得票率は高まっており、自由党に候補が変わったことで集票力が弱まった形跡は見られない。従ってこうした選挙区では、自由党も、労働党票をほぼ継承し、場合によっては、若干の上積みをする事ができた、と推定することができる。

一方、表8、表9の右端に掲出した自由党・統一党の組み合わせから自由党・労働党・統一党の三つ巴選挙に変わった選挙の結果に眼を転じると、両党の得票率を合算すると、自由党・労働党が分裂した選挙では、統一して闘った選挙よりも、自由党候補が引き続いて立った選挙区と比べて、いずれの場合も、かなり上昇している。しかし両党が分裂すると、自由党は、両党合わせた得票の5割から7割しか結集できていない。これは労働党と自由党の分裂がもたらす影響が、深刻なものであったことを示している。

また労働党・統一党の組み合わせが三つ巴に変わった場合には、労働党は1910年に1月には、前回自由・労働両党がとった得票の2割、12月には3割しか集められていない。これは自由党との分裂が労働党にとって、致命的な打撃であったことをまざまざと示している。

表10に掲出した、三つ巴の選挙から組み合わせが変わった場合も、ケースが限られているため、一般化は危険である。だが6例、11例と比較的ケースが多い、1910年1月、1910年12月選挙で、候補が自由党に一本化された場合を見てみると、自由党候補は、前回の両党の得票率の合計から、およそ6%を減らしただけで、両党の得票の大部分を獲得している。労働党に一本化された場合も、1906年の場合は、大きく得票を伸ばし、1910年1月、12月でも、前回の両党の得票率の合計より、自由党に一本化された時は5%、労働党に一本化された時は4%をあまり減らしただけでほぼ前回の両党の票を継承している。つまり自由党・労働党に限らず、候補が一本化された場合、前回の両党の得票のほぼ9割の票を集めるのに成功したのであった。

第一次大戦前の自由党と労働党

表11 1906年選挙で、自由党と労働党が争って統一党が
当選した選挙区の1906年、1910年1月選挙の
政党別得票率（％）

選挙区名	1906年			1910年1月		
	統一	自由	労働	統一	自由	労働
Croydon	41.5	38.3	20.2	51.9	48.1	—
Gravesend	57.6	26.2	16.2	55.7	44.3	—
Great Grimsby	50.2	32.0	17.8	48.9	51.1	—
Stockton on Tees	45.5	31.4	23.1	44.9	55.1	—
Wakefield	40.8	22.3	36.9	54.5	—	45.5

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results, op. cit.*,
より算出。

注記1）太字は、当選した候補者を示す。

表12 1910年1月選挙で、自由党と労働党が争って統一党が
当選した選挙区の1910年1月、1910年12月選挙での
政党別得票率（％）

選挙区名	1910年1月			1910年12月		
	統一	自由	労働	統一	自由	労働
Tower Hamlets, Bow and Bromley	41.9	24.6	33.5	44.4	—	55.6
Manchester, South West	42.4	41.0	16.6	48.1	51.9	—
Whitehaven	41.5	29.7	28.8	46.3	—	53.7
Cumberland, Cockermouth	45.2	35.9	18.9	47.3	52.7	—
Gloucestershire, Tewksbury	53.2	44.7	2.1	52.0	48.0	—

出典： F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results, op. cit.*,
より算出。

注記1）太字は、当選した候補者を示す。

こうした分析から見れば、一人区においても、自由党と労働党は、文字通り極めて親密な同盟関係にあり、両党の支持者の大部分は、状況に応じて、

自由党・労働党に票を投じたことが推定できるであろう。もちろん繰り返し指摘したように、労働党はまだ二大政党と互角に闘う政党ではなかった。自由党と労働党が分裂した場合には、労働党は、自由党よりずっと弱い存在でしかなく、自由党との分裂選挙は、労働党にとっては致命的であった。しかし自由党と労働党の候補が統一した時には、労働党は、自由党の支持層をほぼ引き付け、更に票を上積みすることすらできた。一方自由党も、労働党の支持者をほぼ獲得することができた。つまり両党の支持層は、統一党を排除するためには、反保守の大義の前に悦んで手を握ったのである。

この事情を最も雄弁に物語っているのは、1906年選挙と1910年1月選挙で、自由党と労働党の分裂選挙での結果、統一党候補が当選してしまった選挙区の行方であろう。(表11、表12) 1906年に三つ巴の闘いで統一党が当選した5つの選挙区では、1910年1月には、すべての選挙区で、自由党又は労働党候補に対立候補が絞られている。その結果、全国的な自由党・労働党の大きな退潮にもかかわらず、自由党は2議席を奪うのに成功した。更に1910年1月選挙で、三つ巴の闘いで統一党の当選を許した5つの選挙区では、同じ年の12月選挙で、すべての選挙区で自由党と労働党の候補が一本に絞られ、その結果、5選挙区のうち4つの選挙区で、自由党・労働党が議席を奪い返した。全体的な変動があまりなかったために、比較が容易な1910年1月と12月の選挙の得票率をみると、自由党・労働党の支持層の大部分、およそ9割以上が、この革新陣営の統一候補に進んで投票したことが判明する。

5. 結びにかえて

ここであげられた選挙結果から推定される限りでは、イングランドの一人区についても、二人区について既に指摘したような、自由党と労働党の選挙基盤の深い重なりが、ほぼ同じように観察できるように思われる。反保守という大義のためには、双方の支持層は、極めて強い結束を示した。もし労働党が、労働組合に組織された労働者階級を支持基盤にしていたことを否定できないとすれば、自由党は、保守候補を倒すのに必要な場合、労働者に依拠

して選挙戦を闘うことができたのであった。これは、自由党の再生が、少なくとも部分的には、こうした労働者の支持によるものであったことを明瞭に示す証拠の一つであろう。

これは必ずしも投票行動の基礎が「階級的」な経済利害へと転換したということの意味するものではない。労働者の支持が自由党に寄せられた理由をここでの分析から推測することは誤りであろう。だが少なくとも、労働者階級の一部が自由党に進んで投票したことは明らかであり、従ってクラークの提唱した自由党と労働者階級の「革新ブロック」は、歴史的な事実として存在していた、と考えることができよう。

ただし政党の組合せは、他の地理的、社会的な要因と無関係な独立変数ではない。労働党が候補を立てる場合は、当然のことながら、当該の選挙区における社会的、政治的諸条件がその背景となっている。労働党が自由党の票を結集したといっても、それは労働党が統一候補として立てられた選挙区における現象に過ぎない。こうした選挙区を超えて、全国どこでも労働党が自由党の票をそのまま引き継ぐことができたかどうかは、疑わしい。つまり、政党の組み合わせという、純粋に政党政治のレベルの要因だけをとりだして選挙結果を分析したここでの試みは、あくまで、他の要因をひとまず捨象した結果に過ぎないことが銘記されねばならない。この分析は、極めて限定された視角からのアプローチであり、選挙結果を総体的に把握するためには、更に地理的、社会的なレベルでの分析が行われなければならないのである。⁶⁾

【注記】

- (1) 「新自由主義論争」とも言うべきこの論争の発端についての簡単な紹介としては、拙稿「自由党再生の選挙基盤」(松田編『世界システムの変容と国民統合』大阪外国語大学、1992年所収)および拙稿「自由党再生の構造」(松田、阿河編『世界システムの歴史的構図』、溪水社、1993年所収)を参照。またその背景となる19世紀末から20世紀初頭の自由主義についてのイギリスの研究史については、拙稿「自由帝国主義と新自由主義」(一)(二)、『大阪外国語大学論集』第5号、第

- 7号)を参照。
- (2) Peter Clarke, *Lancashire and the New Liberalism* (Cambridge, 1971). 論争の関連文献については、上記拙稿の他、Duncan Tanner, *Political Change and the Labour Party* (Cambridge, 1990) を参照。
 - (3) イギリス全体については拙稿「自由党再生の構造」前掲、74頁参照。イングランドの状況は、表1に掲出。
 - (4) 拙稿「自由党再生の構造」前掲、75頁参照。
 - (5) この時期の選挙制度については、前掲拙稿の他、H.J.Hanham, *The Reformed Electoral System in Britain* (London, 1968), Martin Pugh, *The Evolution of the British Electoral Sytem 1832-1987* (London, 1988) 等を参照。
 - (6) 19世紀末から20世紀初頭の自由党の全体的な伸長、各選挙の状況等については、拙稿「自由党再生の地帯構造」(内田編『英語圏世界の総合的研究』、大阪外国語大学、1993年所収)を参照。ただしそこでは、自由党と労働党を、革新陣営としてひとまず一括し、この時期の選挙の様相と、獲得議席の地帯構造を概観している。

なお厳密に言えば、ボーア戦争の最中に行われ、「カーキー選挙」とも呼ばれる1900年選挙は、必ずしも自由党の19世紀末の危機の局面を完全に代表する選挙とは言い難い。1900年だけではなく、自由党分裂以後の19世紀末の選挙の平均をとって、自由党の停滞局面を表わすのも、一つ方法であろう。しかしこの時期の選挙では、各選挙とも、かなりの数の無投票当選があり、選挙結果を簡単に平均することは難しい。ヘンリー・ペリング Henry Pelling の政治地理学的研究 *Social Geography of British General Elections 1885-1910* (London, 1967) は、無投票当選の選挙区の統一党の得票率を、他の似通った選挙区の得票率から推計し、更にこの期間の選挙結果を平均して地帯構造を分類しているが、こうした手法では、政党の対決パターンが考慮されていない。また、推計を重ねることによってデータに歪みが出る危険も看過できない。ここでは、こうした点を考慮して、最も劇的に変動した20世紀初頭の4つの選挙の結果をストレートに

第一次大戦前の自由党と労働党

分析の対象とすることとした。

- (7) 前掲拙稿「自由党再生の地帯構造」を参照。
- (8) こうした歴史分析においては、包括的なデータが手に入ることは希であり、すべての要因を統計から一挙に投入して、各々の要因の重みを計ることはできない。一つ一つの要因を順次解明するアプローチを積み重ねることが必要であろう。

